

108. dysarthria における発話の途切れ

昭和大学藤が丘リハビリテーション病院¹⁾, 上智大学²⁾, アルバータ大学³⁾, 昭和大学形成外科⁴⁾
織田千尋¹⁾, 小松雅彦^{2,3)}, 荒井隆行²⁾, 今富摂子⁴⁾,
河原明子¹⁾, 出世富久子¹⁾, 岡崎恵子²⁾

【はじめに】dysarthria の発話の途切れを聴覚的、音響的に分析・編集し、異常度との関係を調べた。

【手続き】音声資料：「さくら」の中の2文。発話者：dysarthria 患者10名および健常者10名。判定者：臨床経験10年以上の言語治療士1名

【方法】聴覚判定：言語治療士が患者の発話を聞き、途切れの位置と異常度を判定した。音響分析：健常者10名の音読結果から途切れのパターンとして3種類：全員が区切った syntactic unit 間の途切れ（途切れ1）、区切った人も区切らなかった人もいた途切れ（途切れ2）、誰も区切らなかった syntactic unit 内の途切れ（途切れ3）が観察された。この3種類の途切れそれぞれについて持続時間および頻度を測定し、異常度との関係を調べた。

聴取実験：患者2名の発話中の途切れの持続時間を海木・匂坂（1996）を参考に、0モーラ長、1モーラ長、3モーラ長に編集し、言語治療士が異常度の判定を行った。

【結果】発話長に占める途切れの割合と異常度との間にある程度の相関が認められた。また編集した2名の音声のうち1名の音声の判定においてオリジナルの音声との間に変化がみられた。途切れ2を1モーラ長、途切れ3を0モーラ長および1モーラ長に編集した音声で異常度が4から3に低下した。

【まとめ】途切れの持続時間・位置は異常度の判定にある程度影響を与えていること、syntactic unit 間の途切れよりも unit 内の途切れの方が異常度の判定に与える影響は大きいことが示唆された。